

社説 東日本大震災11年

2022.3.11

東日本大震災の発生から、きょうで11年となる。関連死を含め死者・行方不明者は2万2千人を超える。宅地造成やインフラ整備などのハード事業はほぼ完了したが、多くの地域で加速する人口減少と高齢化が再生への歩みを険しくしている。被災者一人一人の復興の格差は広がっている。震災前の生活を取り戻した人がいる一方で、今も震災の影響から脱することができない人がいる事実を忘れてはならない。高齢者ら自力再建が困難な人を救うための法律や制度はいまだに十分であり、災害に備える課題は残されたまま。誰一人取り残さない支援を目指す、暮らしの「事前復興」がより重要性を増している。

被災者を支える

刻化した人も少なくない。阪神・淡路大震災を機に1998年に生まれた被災者生活再建支援法に基づき、直接給付される「生活再建支援金」は1世帯当たり最大300万円で、対象は全壊と大規模な半壊に限られていた。半壊であっても実際には生活できない住宅は多い。多くの人が修繕費を捻出できず、壊れた家にブルーシートを張るなどして住み続けた。支援金の対象に「中規模半壊」が追加されたのは2020年のことだ。既存の支援制度では、被災の度合いを測る基準が、家の壊れ方を示す「罹災判定」に大きく偏っている。家をなくした人には比較的手厚く、家が残った人には自助努力が求められる。物資や情報など自治体の支援も避難所や仮設住宅が中心となりがちだ。在宅被災者は実態把握も難し

伴走型支援を制度に

被災者は家を失っただけでなく、心身が傷ついたり、失業に追い込まれたりするなど直接、間接の被害を受けている。以前から抱えていた暮らしの問題が、災害によって解決困難な状況に陥る人もいる。苦しむ被災者に対し、行政が「申請主義」という高い壁をつくり、生活再建の行く手を阻む現実もある。必要な支援は資金、仕事、教育、

暮らしの「事前復興」は進んだか

ため、支援の流れから取り残される危険性が高いとされる。約33兆円を投じた復興事業費の中で、給付など被災者支援に充てられた経費の総額は1割に満たない。自宅を修繕できれば、被災地の課題である地域コミュニティの分断を防ぐ対策にもつながる。支援の範囲や金額の拡充が欠かせない。

医療など、人それぞれに違う。福祉や住宅などの専門家らが連携し、被災者を戸別訪問して事情を聴き、再建支援メニューを提供する。こうした伴走型の支援手法が「災害ケースマネジメント」である。

東日本大震災では、仙台市や岩手県大船渡市で自治体と民間団体が協力して進めた。16年の熊本地震や18年の西日本豪雨の被災地でも実践された。鳥取県が条例で制度化するなど導入する自治体が相次ぐ。ただ、災害ケースマネジメントの規定や責務はなく、自治体によって被災者対応に格差が生じかねない。大都市圏では、多くの被災者に対応できるだけの人材や財源を自治体だけで確保できない恐れもある。全国知事会や日本弁護士連合会などは制度化を求めてきた。

兵庫県弁護士会の津久井進会長は「一見遠回りのようだが、取り残される人が減ることで被災者の生活再建は早まり、結果として国の財政負担も減る」と意義を強調する。

福浦のビシャゴ岩へどうぞ

額田 一正 64歳 和利尻島から南は屋久島まで(無職 赤穂市)で登りました。今まで百名「はりま山歩き」。ふと山や花を主題にした本は数手に取った本の写真に、目多く目にしましたが、石とがくぎ付けになりました。地層から山に迫った本は新何と地元・福浦の「ビシャゴ岩」が「小野アルプス」モリかなと錯覚します。より大きく写っているでは「ビシャゴ」とは魚好きの鳥ありませんか。自宅を見下ろすアングルは、私のお気に入りの名は、このミサゴに由来するようです。岩からの眺めは絶景で家島や播磨灘の小島が数多く見えます。晴れた日には遠く大鳴門橋も見えます。読者のみなさん、ぜひ一度、福浦のビシャゴ岩を訪れたいです。

お福分けをもらいました

黒崎 加奈子 68歳 自分の歯で食べる毎日のこと(主婦 加東市)飯がおいしい。これだけ食べられるから、まだ死なねへんなあと笑う母。肉が大好きでこの日も肉いっぱい焼かしてあげた。ケキを前に孫、ひ孫に囲まれた笑顔の写真と「今日はおばあちゃん誕生日おめでとう。おめでとう。うれしいね。お母さん。電話がありましたよ」とのメッセージでした。「世界一しあわせな、おばあちゃんです。みんなありがとう。感謝です」と受けもらいました。いつもぐに返信しました。自慢のありがとう。

たばこは不必要

森藤 悠 11歳 (小学生 姫路市)私は、たばこは不必要だと考えます。たばこをすうとがんや心臓病にかかる可能性が高くなったり、思考力や運動能力が低下したりと、体にたくさん悪い影響を受けてしまいます。たばこの先から出るけむりをすわされた人も、たばこをすう人と同じようなえいきょうを受けます。たばこをすうことは、自分だけでなく周りの人にも害をあたえるといえます。「たばこは必要だ」と思う人の意見も理解できます。たばこをすう人からするとたばこはおいしいけれど、すうと気分がよくなるからです。ですが周りの人からすると、たばこはくさくさ、気持ちのよいものではありません。自分の気持ちのよさより、自分や周りの人の健康の方が大切なのではないでしょうか。このように考えると、たばこは不必要だと考えます。



発言

孫の幼稚園通いに同行して

西井 幸路 65歳 日差しが強いので、木陰を探し、時には、小さな影「ばあちゃん、幼稚園にで影踏みしながら歩きまわろう」と6歳の孫娘。毎朝、バス停までの数百歩をの美を拾いながら、秋の朝、バス停までの数百歩をの美を拾いながら、秋の朝の楽しみでもあります。雨歩きました。冬は、今年はや風、雪などお天気の悪い日は、車で送りますが、ほろほろと作るながら歩くといい日は、しっかり手をつないで歩きます。春は、河川敷やあちこちの桜がともきれいです。気と癒やしをいっぱいもらいながら歩きます。暖かい春を探しながら幼稚園に行きました。夏は、朝早くから修了まで歩いて行きました。

老々介護の日が来た

渡邊 和加子 90歳 た。痛みはじこからき(主婦 宝塚市)いつかはくるだろうと漠然と思っていたが、突如脚が切って落ちてきた。老々介護である。93歳と90歳。難儀は徐々に忍び寄っていたが、お互い自身のこと、まだまだ人に頼らず動ける。それが当然のように過ぎてきた。夫が「足や腰が痛い、動かない」と言いだした。あつちの病院、こつちの医者へ通うのに、タクシーで走り回るのが日常になっ

しもやけの季節に母を思う

今本 美恵子 62歳 の指は、真っ赤から太く赤(主婦 豊岡市)黒くなり、常に自身でできている姿が脳裏かきた。毎年同じ箇所にもやけがやけができる。そのたびに何を思い出す。何かにつけ母の足指を出し、「なでて」との年齢になっても「お母さん、足指をさす。しほりをする。と「ありがとう」と言う。しもやけを見るたびに、わが子への虐待を見るたびに、なぜ、と心が痛み、涙が落ちる。この年齢になっても「お母ちゃん守って」まて仕事としていた。手足と言っている私。誰が子ど



あらい太郎

投稿のきま 4000字程度。説話は、はがきでの余白、別紙の名、年齢、職業、番号を明記し、返却しませんが、返却不可。一慮ください。学校向けに配信版新聞「まなび」で紹介させていただきます。〒711(住所不詳)集局文化部 tusen@koi